

エドナ・セント・ヴィンセント・ミレーの 詩壇進出について

石 本 キ ミ

1) “ I am thine Angel, Muse, Madonna, all in one.”

Charles Baudelaire

(一)

メイン州生れの赤毛碧眼の少女 Edna St. Vincent Millay (1892-1950) は高等学校時代には当時のアメリカの青少年の文芸雑誌 *St. Nicholas Magazine* の愛読者であり、又投稿家であつた。1906年から1910年、彼女が18才になり同誌への寄稿資格年齢の限界に達するまで詩を投稿し度々入選入賞の栄を受けている。その最後の機会には賞金として得た5弗で²⁾ Vincent は兼々欲しがつていた Browning の美しい詩集が買えた事を迎も喜んで、わざわざその雑誌社に宛てて感謝状を出している。今まで再々の入賞により大きな激励と援助を得た事を感謝し、18才になつたのもう今後は投稿出来ないのは残念であると袂別の挨拶を述べた手紙が³⁾ *Letters of Edna St. Vincent Millay* に収められている。私は今この書簡集によつて Vincent のアメリカ詩壇進出に至るまでの経緯を明らかにし他日機を得て極め度く念願して居る Vincent Millay の sonnets 研究の序説とし度い。

Vincent と二人の妹の極く幼い頃にどんな事情があつたのか判らないが、両親は離婚し、父は独り離れた町で学校教師をして暮し、娘達は母親と Camden の町で賑やかに楽しく過していたようである。娘達は父親の許え繁々出かけるらしく、殊に Vincent は高等学校を卒えてからは別に進学の計画もなく、遠くの親戚を訪問に出かけたり、父の病氣の見舞かたがた滞在して、その間には気のむくままに詩作の筆をとつていたようである。1912年の春偶々彼女の母親がふと手にした古新聞に載つていた詩の募集を娘の滞在先まで連絡したのが計らずも Vincent の詩壇進出のきっかけの一つとなつた。母親にとってはその

前年の誕生日を迎えて以来作品発表の場を失った娘のためには恰好の募集と思えたのであろう。1912年の秋に *The Lyric Year* としてアメリカ詩の年鑑の如きものが New York で刊行される予定であつた。Vincent は早速 *Renaissance* と *Interim* の二篇を送つて審査を楽しみにしていた。一方その夏彼女の町で催されたある会合の席で Vincent はこの同じ詩を朗読し、又自ら作詞作曲した歌を独唱した事があつた。その時それを聴いた Miss Dow という New York の YWCA の幹事養成学校の校長がこの若い詩人の才能を認めて、親切な事に Vassar College への進学を勧め、奨学金の斡旋をし、1913年同大学入学を前提としての資格を充実させるために同年の春から一学期間 Columbia の Barnard College に一時編入してもらふ手続も着々と進めて呉れたので Vincent は New York へ出る時を待つ許りであつた。それで彼女の胸は明るい希望に輝き堅い決意に張りきっていた。更に彼女を秘かに有頂天にさせた事は、*The Lyric Year* の応募作品10,000篇の中から選ばれる100篇の中に *Renaissance* が這入る事は確実であるし、又更に第三位までの入賞の中第一位になり500弗の賞金が与えられそうだと予想を気の早い編輯者 Ferdinand Earle が知らせてくれた事である。そもそも Edna St. Vincent という名は男性に間違えられそうな名前であるし、彼女の筆蹟は乱暴で男性的であつた。又⁴⁾ *Renascene* の如何にも完成しきつた手際は成人の作としか思えなかつたので、“Edna St. Vincent Millay, Esq., Dear Sir: ...” として入賞の予報を寄越した。而し猶々十一月に *The Lyric Year* が出版されると彼女は四位になつてゐた。宛も早すぎる栄冠は彼女の之から伸びて行く詩才の妨げとなる事を誰か案じているものがあるかの様であつた。而し Orrick Johns, Richard Le Gallienne, Bliss Carmen, George Edward Woodberry, Vachel Lindsay, Louis Untermeyer, William Rose Bénénet, Joyce Kilmer, John Hall Wheelcock 等当時名声鏗々たる詩人連に伍して入選した事で Vincent は勿論満足であつた。第一位入賞の栄冠を獲得した Orrick Johns は自分の入賞程思いがけない事はなかつたと云つてゐる。「この Anthology を手にしてなお更その感を深くした。この詩集の中で際立っているのは Edna St. Vincent Millay

の詩である。その事はすぐ権威ある批評家連も認めた。自分の授賞は名誉でもあつたが、且又気まりの悪い事であつた。」と自伝の中に書いている。*The Lyric Year* の編輯者 Earle 氏をも含めて三人の⁵⁾ 審査員は評価の不当をなじられて困つたと云う事であるが、宛もそれが理由であるかの如く、*The Lyric Year* は毎年刊行の計画であつたにもかかわらず、僅か第一号を出しただけで立消えとなつて了つた。そのためこの書は Vincent Millay の *Rena-scene* が初めて活字になつて掲載されているために珍籍蒐集家の垂涎おく能わぬものの一つとなつている。又矢張り同時代の詩人であり、且共にその作品が *The Lyric Year* に収録された Witter Bynner と Arthur Devison Ficke の友人同志は共にこの詩集を手にして、「自分等の詩は勿論、どの詩を読んでも何の感興も湧かなかつたが、Miss Millay の詩にぶつかつて感激を抑えきれず、二人で通りすがりの無名戦士の記念碑に座り込んで終りまで読んだ。彼女の詩はこの書に光を点じている。註にある様に編輯者がこの詩の作者を男性と間違えたのは滑稽な事だが、成る程二十才の可愛いお嬢さんはああいう風に詩を結びはしないでせう。筋骨逞しい四十五才の男の人の手際ですよ。けれども Bynner 氏も私も疑念をあげて見ようなどとは思いませんから御心配無用……」と、編輯者に書き送つたものを、編輯者は Vincent に取り次いで自分で返事を出す様にと注意をしたので、Vincent は先づ *Rena-scene* えの讃辞に対して Ficke 夫妻と Bynner 氏に感謝の言葉を述べ、つづいて Ficke 氏と Bynner 氏に対して弁明の一文を寄せている。「御二人がとんでもない疑念をお持ちの事を Mr. Earle から御知らせが御座いましたが、御二人共全く誤解なやつていらつしやると申し上げなければなりません。私の名声は危険に瀕して居ります。私は断然「筋骨逞しい男性」にはなりません。それは逞しい男性方を嫌つているのでは御座いません。どうしてどうしてそれどころでは御座いません。でも私は矢張り女でいたいと思います。御二方は頭脳と逞しさとは不即不離とお考えでせうか。私はそうは思いません。でもこうした事は個人的な考えの違いで御座いますね。けれども女の方が私は二十才ですと言つていますのにいやあの女は四十五だよなどおつしやつてはいけません。それは意地悪も度がすぎ無分別な事で御座います。……」と容赦ない反撥の一撃をかえしているが、

更に「本当の事を申しますと、全然御存じなくて私に下さいましたお賞めの御言葉を感謝致して居ります。と申しますのはまだ目下の所 四十五才に成り度いとか逞しくなり度いと 念願致しては居りませんが、もし私の詩がそうゆう風に私の姿を示すならば、言葉に尽せない程私は嬉しう御座います。次の詩は私が幼い頃に書いたもので御座います。

Let me not shout into the world's great ear
Ere I have something for the world to hear.
Then let my message like an arrow dart
And pierce a way into the world's great heart.

御二方が私の “*Renascene*” について仰言つた御言葉を私はどれ程有り難く思つて居りますかお判りいただけないでせう。

もし *Current Literature* の 1907 年 4 月号を御覧いただければ私の詩 *Land of Romance* についての批評が載つて居ります (Mr. Bynner の詩 *Fair of My Fancy* の評のすぐそばです。) Mr. Edward Wheeler の批評に興味がおありかと存じます。『次の詩 (作者は E. St. Vincent Millay) は非常に驚くべきものである。作者は少年か少女か判らないが、まだ十四才である。』E. St. V. M. より

追伸 筋骨逞しい男性から写真をお送りいたします。私大笑いしなければなりませんわ。』

こうした機智に富んだきびきびとした手紙は次から次へと New York の Bynner 氏 Iowa の Ficke 氏を往きつ戻りつし、この二人の未知の男性との交友は急に展開していつた。殊に Ficke 氏は法律の専門家であつたが Vincent にとつてはよい詩の指導者であり、又友人であつて最後まで Vincent の敬慕的であつた。親しみが深められるにつれてこの三人の友人は一時微妙な三角関係の危機に曝されたこともあつたが、この二人の男性、とりわけ Ficke は彼女の得意な sonnets の inspirer であつた事は間違いない事である。New York への遊学を翌春に控えた彼女は定めし自分の世界が無限に拡がつて行くような期待に胸を脹らませて居た事であろう。Untermeyer から讃辞を寄せられ、*Chicago Post* 誌に批評を書いて貰つたり、見知らぬサイン狂から

The Lyric Year を一部寄越して彼女の詩の頁に署名を求めて来たり彼女の喜ぶ事や戸惑う事も多々起つて来た。Vincent が一篇の詩によつて世間の注目を集めたのは彼女が Vassar に入学する前の年の事であり、まだ New York に往つた事もない時代の事であるのに、屢々「十九才でまだ Vassar の学生⁶⁾の頃」と書かれているのは誤りである事は彼女の書簡集によれば上記のとおり明かである。

さて、之程問題にされた詩“*Renascence*”は八音節の押韻対句 (Octo-syllabic rhyming couplets) の 214 行にわたる長詩で、小高い丘から見はるかす山や入江の島々の静かな風景の中で詩人が体験した神秘的で強烈な感情の描写である。そこに見える風物は身近で気安く眺められていたのに、突然小さく見え、空は遠く退いて了い、私は息が切れるので、そこに身を横たえて空をつくづく見上げていると、成る程空は左程巨大にも思えず、手で触れる事が出来るような気がするので、さわつて見ると「無限」Infinity が上から落ちて来て詩人の体に重くのしかかつた。私は叫ぼうにも胸を圧されて声は出ずその上何か不明なもの (Undefinable) が私の精神を圧迫し私の眼に遠眼鏡をおしつけて、無限な空間の無辺の広がりを見せられた。耳には天体の親しげな囁きを聞き、空の幕屋の軌る音や「永遠」が時を刻む音を聴かせられた。そして私は遂に過去現在未来永劫に亘る真理を見聞し、之を悟つて宇宙の核心まで貫くとそこから離れる事が出来なくなつた。それでも地上に苦しむ人々の事が気にかかり、その人々の叫び声が天まで響いて来る。そして無限は有限の私を押しその重圧の下に死の苦しみに喘ぎつつ、死を願いつつ、死にきれないで苦しんでいると、だんだん土中深く沈んで埋まつて了つた。すると胸を圧した無限は何時しか転び去り、栲問にかけられていた私の魂は弾けるように体の外に飛出した。体は冷たい土に深く埋もれたまま悩みから逃避出来た事を喜んで、この世に残した美を想起し平和な眠りを求める気持は失せ、只管この世えの新生を神に叫び求めた、天人の翼の擦れ合う音が遙かに聞え、嵐の雲があらわれて沛然と雨を注ぎ、私の埋もれていた墓は洗ひ流されて了い、冷い雨の指先が私の唇をそつと濡らし、閉ぢついていた眼に触れてくれたので、私は再び見る事が出来た。深い呼吸をすると同時に私の魂も 私の中に戻つて来た。そして私は復活の歡喜の叫び声をあげて飛び起きた。

Ah! Up then from the ground sprang I
And hailed the earth with such a cry
As is not heard save from a man
Who has been dead, and lives again.
About the trees my arms I wound;
Like one gone mad I hugged the ground;
I raised my quivering arms on high;
I laughed and laughed into the sky.

胸は高鳴り目は涙に咽びつつ神に叫んでいる。神の輝やかなしい姿は暗闇も隠すことは出来ない。野原を歩く神の姿を私の眼は必らず仰ぎ見るし、どんな静かな声で語られても私は必ずお答えしますと誓っている。空間と時間を自由に駆使する人となるか、或いは時空に悩まされる人となるかは靈魂の在り方にかかっていると、詩人は *Renascene* の歓喜に酔いつつこの詩を結んでいる。

East and West will pinch the heart
That cannot keep them pushed apart
And he whose soul is flat—— the sky
Will cave in on him by and by.

この詩はうら若い十九才の少女がある恐るべき真理 (some terrific truth) をはじめて見、息もつけない程の畏れの気持 (breathless awe) で自然と生えの神秘的な愛を吐露した新生の記録を直接に描写したもので、Coleridge の *Ancient Mariner* が矢張り新しい生えの復帰の寓意物語 (Allegory) であるのに対し、*Renascene* は作者自身のイメージの卒直な narration で容易でない一つの試である。Vincent は

「……正直に申し上げますが、私はあれを見たのです。貴方が想像なさる以上にはつきりとあのすべてを見たのです。あれは全く一つの体験で御座いました。なかなかやさしくはお話し出来ない体験談の一つで御座います。私の詩はみな私には real な事許りです。そして大変苦心いたします。専横で時にはむごい程の想像力に私はとらえられます。……」

と。又その同じ手紙に「私は “accidents of composition” は人が考えるよりは遙かに尠いものだと思います。」と云っているのによつても、この時十九才でもう既に詩人として最も純粹な立場をとり 推敲彫琢完璧を期していたので、決して偶然大人を驚かし、大人の作品と思われるような作品が出来たのではない

ことが判る。而し彼女は唯一篇の詩が人々を驚歎させ得てもそれだけで、このまま詩の世界に飛び込んで行く積りはなかつた。

7) I have yet to learn the ABC's of my art. I am hoping that college will help me;— but if I should come back a suffragette instead of a poet, wouldn't it be dreadful?

既にこの時 Vincent は将来詩人として立つ事を心に定めて居た。只管大学教育を俟みとしてそれによつて高い教養を積み、之まで漫然と読み漁つた広く浅い文学を深く極めその背後に流れるものを跡づけ度かつた。彼女の詩の泉は文学の造詣を深めることによつて豊かにされなければならなかつた。

(二)

1913年の早春 Vincent は愈々予定どおりに New York に出てそれから四年半の間学生生活を送つた。先づ Columbia の Barnard College で Latin や作文、その他の学課を補習的に勉強し、秋には美事 Vassar College に入学する事が出来た。Barnard College 在学中は New York 市内に住んでいたのも American Poetry Society の催すいろいろな会合に招かれるままに出席し、Sara Teasdale に会つたり昨年以来 Pen Pal であつた Witter Bynner に逢う事が出来た。そして彼が詩人たちの前で Vincent の *Renascence* を朗読するのを聴くのは全く光榮であつた。Forum 誌が彼女の作品 *Journey* と *God's World* の二篇を 25 弗で買上げてくれたし、又彼女の詩集出版の申出も既にこの時受けたが、賢明な彼女はそれを辞退し他日を期す所があつた。Vassar College 入学以来は全く勉学に集中していた。Vassar の所在地は Poughkeepsie といつて New York 市から 65 哩北の方に隔つているし、厳格な寄宿舎の規則もあり外部との交渉は可成り制限されていたので、自然彼女の創作活動は学内に限らざるを得なかつた。Vincent は当時の Vassar の B. A. Degree の必修課目の外に自分の興味に従つて英語を基盤として、古代英語と Chaucer, Late Victorian Poetry. 上級作文、英国戯曲、演劇等を選択しそれぞれ權威ある教授について学び、殊に外国語については古典語は勿論独、仏、伊、スペイン語を修め、それらを通じそれぞれの文学を研究した。大学の二年

目にはフランス語の詩も書いているし、後には Baudelaire の詩を George Dillon と共訳で出版した程仏語には特に熱心であつた。

Vincent が母や妹達に宛てた手紙はいつも彼等に対する濃やかな愛情に溢れ、彼女自身の身の事細大洩らさず書き送っている。入学後半年位の便りの中に寄宿舍生活の宗教的な面について書いている。日頃友達から異教徒扱いをされていた Vincent が数人の友達と毎夜十時に祈禱会を持つようになって、それをこよなく楽しいものに思う自分を訝つている。而し *Renascence* に見られる一連の靈的な体験の中の靈魂の高揚、及び同じ時代の作品である *God's World* 中の

Lord, I do fear
Thou'st made the world too beautiful this year;
My soul is all but out of me,—

この叫びも美の陶醉の故でありながら、その美は神の創造によるものであるとの意識を伴っているからには矢張り靈の高揚の一瞬でもある。彼女はたしかに神を知っている。唯既成の枠に入れられる事を潔としなかつたのだ。娘の言葉を借りれば New England の「聖書を暗んじている」敬虔な母親の薫陶を受けた Vincent だけでなくその学友も同様に教会に行かねばならないのがとても嫌だつたので、出来るだけ怠ける機会を狙つてい乍ら、それが何だかはつきり云えないけれども、何か持たねばならないもののある事を意識しつつ、自発的な活動によつて互いに励まし合つた。殊に Vincent はこの小さな集いに於て予め準備しておいた小さな感話をしたり、聖書を朗読したり、又歌をうたつて聞かせるのを楽しみにしていた。級友よりは年上であつた故か万事積極的に Leadership をとり大学の行事には必らず彼女の多才な技能を以て奉仕した。在学中はまるで彼女が Vassar の音楽係りを一手に引受けていたようで、辞任する教授のために謝恩の歌をつくりそれを学内挙つて歌い、その歌は当分の間学内の流行歌となつた。毎年行なわれる Tree Ceremonies の Marching Song も彼女が作詞編曲しそれが過去にあつたどの歌よりもよいと賞められている。演劇にも機会ある毎に出演した。*French Club* の演出で Edmond Rostand の *Les Romanesques* の Sylvette の役を演じたり、Shaw の *Candida* 中 Marchbanks の役、それから Hazel Mackaye の *Pageant of Athena* にも出演、又

Synge の *Deidre of the Sorrows* では Deidre の役をつとめ、Selma Lagerlof の *The Christmas Guest* にも出演した。Vincent の Vassar 最後の年には自作の詩劇 *The Princess Marries the Page* の演出に当つて彼女自ら主役を買つて出た。又同じくその年の十二月上旬に Masefield の *Locked Chest* の上演の折には役女は Vigdis の役に出た。年が改まるとすぐ Masefield 自身からの思いがけない手紙が彼女を喜ばせた。*Locked Chest* の最初の上演にあつて Vigdis の役は素晴らしかつたと聞いたが、Vigdis は詩もかくという事も聞いている。是非詩を送つて欲しいとの事であつた。

学生時代の最後の幕が將に降りようとしている時に、Vincent を周章させ情気させるような事件が起つた。一夜彼女は友達と New York 市に外出してうっかりしている間に、とつくに門限に間に合はない時間になつた事に気がついたが、既に外泊許可の限度を越していたので教授会は強硬に彼女の卒業式列席を認めなかつた。Vincent としては在学四年間を通じて大学のために積極的に貢献して来たし、勉学の方でも学生の本分を十分に尽して来たのに最後になつてこの様な有様で追い出される事は彼女の誇りが許さなかつた。勿論卒業は出来るが、まるで「鱈の包みのように」卒業証書を送つて来れるんだそうですと母に歎き訴え詫びている。而し彼女を誇りとしている彼女の級友はその不運を放つて置く事が出来ず、全員署名により教授会に特別措置を請願した。再三教授会が開かれた後遂に強硬派も特別のお目こぼしを認めたので Vincent も皆と一緒に角帽に gown を着けて嬉々として卒業式に出席する事が出来た。その席上彼女の作詞作曲した *Baccalaureate Hymn* (学士号授与に当つての讃歌) や行進歌も歌われ当然 Vincent Millay は卒業式の花形であつた。

Thou great offended God of love and kindness,
We have denied, we have forgotten thee!
With deafer sense endow, enlighten us with blindness,
Who, having ears and eyes, nor hear nor see.

若い詩人はこの讃歌の中に自分の personal な神への反抗的な精神を知性ある現代人の反逆であるとしてうたつている。神の存在を否定し神を忘れる反逆児として、神を愛と優しさに満ちた怒りの神と paradoxical な呼びかけをなし、眼ありて見ず、耳ありて聴かざる我等に unholy な事は聞えない聡さを与

え、ungodly な事に対して我々を無知にし、吾々の心を明るくし給えと。Vincent はわれわれは常に神の宮を避けるものであるが、神は吾々の傍から去らないでほしい。われわれが神の御名を呼ばわない時にも、われわれの声を聞きつけて来たりたまえと God of love and kindness に甘えている。曲は四重唱で *St. Vincent* と名付けられている。この Hymn に見られる無遠慮であるが naive な sophistication は初期の *Renascene* や *Interim* の時代には見られない傾向であるが、一方から見ると初期の Vincent は非常に生真面に体験を詩に再現する事に腐心していたが、だんだんとその子供らしい素朴な無技巧から抜け出して無技巧の技巧を凝らし、尚且天真らんまんて激しい感情の表白を試みている。

とにかく卒業式の歌に限らず学校時代を通じていろいろ特別な機会に詩を書くという訓練を自らに強いた事は後に彼女が詩人として活躍するようになってどんなに役に立ったことだろう。大学が彼女に与えてくれた教育は勿論の事こうした自発的な創作活動、演劇への参加、詩の朗読等それらひとつひとつが Vincent の今後の成長の助けとなつたのである。

(三)

1917年6月 Vincent は Vassar を卒業したが、先づ彼女にとつての関心事は如何にして生きて行くかという事であつた。奨学金を離れて了つたので生活費の凡てを自ら産み出さねばならなかつた。“I have a perfect passion for earning money.” と云つて腕を撫でていた。そして母を New York に呼びよせて一緒に暮し度いと夢のような事も考えていた。而し詩を売る事は New York に初めて来た時から既に始まつていたが二篇で 25 弗とか三篇で 20 弗とか、それも時偶の需要があるに過ぎなかつた。それで詩は余暇の仕事とし、生きるために何か他の方策を建てなければならなかつた。一時はどんなものでも最初に来た仕事に着く決心で探していたが、彼女の詩才を認めてそれを伸ばさせ度いと好意から秘書に来てほしいと云う富裕な一婦人があつた。秘書ならば電話がかかつて来たら何をしていても飛んで行かねばならないだろうし、何時かかつて来るとも判らない電話に脅されては詩なんか書ける筈はないと云つ

て辞退した。先づ彼女が選んだ仕事は舞台に出る事であつた。詩を売つて名を売るよりは華やかな舞台生活は名声への近道と考えたためかと臆測する人もあつたが、舞台の仕事は彼女にとつてはあまり苦勞しないで勤まる事であつた。時宛も the Provincetown Players が旗上げして Floyd Dell の劇を上演するために無邪気な娘の役をする少女を募集しているのを聞いて、赤毛の瘦せぎすな少女が面接にやつて来た。験しに手当り次第の台本を読ませて見ると迎も巧くこなしたので早速採用と決定したが無報酬であつた。その時彼女は妹の Kathleen と二人で当時 New York の芸術家達の天国であつた Greenwich Village に小さな一部屋を借りて其処から Provincetown Playhouse に通つて、いくつかの劇に出演したり又注文に応じて一幕劇などを書いたりしていた。その頃の彼女の詩劇 *Aria da Capo* (1919) の上演は非常に印象深いものであつたという事である。凍るように寒い貸間で過す貧しい生活を語数の極く尠ない短詩 *A Fig from the Thistle* 中の *First Fig* に冗談めかしく quatrain に明るい気持でうたつているのは、更に要約的な簡潔な *Second Fig* の Couplet と共に忘れ難い抒情詩である。America でこの詩程頻繁に引用される詩は他にないと云われる程人口に膾炙している。即ち

My candle burns at both ends;
It will not last the night;
But ah, my foes, and oh, my friends—
It gives a lovely light!

微塵程の暗さもない。けれどもそれは Vincent の本当の生活でないと云うかの様に *Second Fig* に於ては更に compact な表現によつて示している。

Safe upon the solid rock the ugly houses stand:
Come and see my shining palace built upon the sand!

Vincent の部屋の二つ三つ先には嘗て Poe が住んでいたと云う部屋があつた。其処で Poe が *Ligeia* を書いたと言ひ伝えられているが、Vincent Millay はその近くの寒い部屋で楽しそうな *Macdougall Street* や Ballad 風の *She is Overheard Singing* や大胆な sonnet “Oh, think not I am faithful to a vow!” などを書いた。彼女が一番生活に困つてゐる時の詩が最も明るいというのは不思議であるが、学友の一人に宛てて、

Some day I shall write a great poem to you, so great that
I shall make you famous in history, or dedicate a book to
you, or collect a fortune & die & leave it to you,— or
perhaps, more than all of these, I shall write you a letter,……

と humor たつぷりの中に野心の仄きを見せている。

その頃 *Poetry Magazine* の Harriet Monroe に “Spring is here,—and I could be very happy, except that I am broke.” と前置きして目下印刷中の自分の詩に対して即刻成るべく 沢山支払つてほしいと 催促状を出しているのによつてもこの当時彼女の悩みは 経済問題であつた事がわかる。之を切り抜けるために短篇小説や Sketch 風の小品を Nancy Boyd という名で盛んに *Ainslee's Magazine* に出していたが、それらを纏めて *Distressing Dialogue* として 1924 年に出版した。又友人の斡旋によつていろいろな会合に自作の詩を朗読するために招かれて行く事も屢々あり、後にはラジオに出演したりレコードに吹込んだりして、詩の朗読の決定版とされた程で、之は彼女が中年になつても健康が許すかぎり続けられた。

一方彼女の詩の出版は極めて順調に進み、つぎつぎと新作を需要に応じて雑誌や新聞に出していたが、彼女が Vassar に入学する以前から話のあつた Harper and Brothers 社から *Renascence and Other Poems* として *Renascence* の圧巻を巻頭に掲げ次に Vassar の Poetry Contest に入賞した *Interim* を置き、それにつづいて初期の詩のみで一巻として大学卒業の年の秋に出版した。Christmas を当て込んだもので、Vincent が詩の朗読や演劇の指導に行つていた Vassar の近くの私立学校 Bennet School の生徒や母校 Vassar の学生等が喜んで友人間の贈物として利用したようである。そのため一部 10 弗もする和紙の豪華版まで出来た事を母に報告している。この第一集は Vincent の学生時代とその以前の作品の collection で若々しい ecstatic な作が多い。それから一年隔てて 1920 年に *The Second April and Other Poems* として百花瞭乱といったような花の詩や春の詩を多く集めて、それと対照的に elegies を数篇添えて彼女に進学の道を開いてくれた恩人 Caroline B. Dow に dedicate している。第一集に見られる

Curse thee, Life, I will live with thee no more!
Thou hast mocked me, starved me, beat my body sore!

The Suicide

の如き seriousness とそれに伴う重苦しい調子が、第二集では同様な subject matter 死を取扱つた *Burial, Lament, Elegy, Dirge, Epitah, To a Poet That Died Young, The Paet and His Book* 等に於ても詩人は死がこの世の美を蝕み亡ぼすものとして歎き悲しんでいるが、その調べは不思議な程軽快になつている。

There will be rose and rhododendron
When you are dead and underground;
Still will be heard from white syringas
Heavy with bees, a sunny sound;

Elegy Before Death

それから寡婦の歌う *Lament* に悲しい諦めも

Life must go on,
And the dead be forgotten;
Life must go on,
Though good men die;
Anne, eat your breakfast;
Dan, take your medicine;
Life must go on:
I forget just why.

遺された子供らのために明るい響となつているだけに一層母親の健気さと、その奥にひそむ悲しみを感じさせる。なおこの第二集に収められている *Exiled* は New York に出て来た詩人が Maine の海への郷愁を描いたもので

Wanting the sticky, salty sweetness
Of the strong wind and shattered spray;
Wanting the loud sound and the soft sound
Of the big surf that breaks all day.

海に近く住んだ事のある人ならば、そして海から遠く隔つて海を憶つた事のある人ならばこの詩の与える音の感覚に同感の満足を感じると共に Masfield の *Sea-fever* を必ず思い出し、海への nostalgia に胸ゆすぶられる抒情詩である。第三集として出したのが *A Few Figs From the Thistle, Poems & Sonnets* (1922) で Vincent が大学卒業後 Greenwich Village に住んでいた頃の作品を集めたものである。先に引用した *Two Figs* の他にも同様に軽妙な詩が多く含まれている。前述の *She is Overheard Singing* や *Macdougall Street* などその最も著しいもので、これらに於ては第一集に見られるような表現の苦心の跡は少しも見られない。將に詩人に生れついた人がおのづから楽々と歌い出す気軽さである。その巧まざる率直さが “I shall forget you presently, my dear.”

とか “Oh, think not I am faithful to a vow!” とか貞節を要求されている女性の詩としては、殊に New England の Puritanism の中で育つた女性にしては、あまりにも pagan で shocking な utterance として注目されもしたが、彼女の Paganism は彼女が詩を書き始めた頃から常に形式に於て従つて来た英語詩の伝統の中で宛も古い革袋に入れられた新酒のような魅力、即ち古い規範から脱出しきれない、反撥的な段階にある若さの魅力を持っていた。それで当時の若い人々からは歓迎されていた。その頃の America の一流雑誌は競つて Edna St. Vincent Millay の詩を掲載し度がり、それが実現しなければ売行きに影響するという具合であつた。後に彼女の Letters を編輯した友人 Allan Ross Macdougall は 1920 年の夏彼女の詩を携えて英国に渡り *The Nation* という政治及び文学関係の週刊紙に出すよう斡旋し、又彼女の詩劇 *Aria da Capo* を出版し且上演するように骨折つてくれたので彼女の名は本国では勿論海の彼方でも知られるようになった。

さて当時の America 詩壇は Carl Sandburg, Vachel Lindsay, Wallace Stevens, Ezra Pound, Marianne Moore, Robinson Jeffers, T. S. Eliot, John Crowe Ransom, Conrad Aikes 等の先輩詩人が詩型に於ては彼女より大胆な試みをなしつつ前世紀の大詩人 Whitman によつて暗示された Americanism を表現することに努力していた。そして彼女の同時代の詩人たちは vers libre とか imagism とか vorticism 等の流派に分れてそれぞれの motto とする所に凝っている時、Vincent Millay はどの流派にも属せず、全く独自の立場で英語詩の型の伝統を墨守しつつけながら自由奔放な lyrical utterance をつづけて来た。詩を書き度い気持と詩作を生きるための手段とする事とが、Vincent の場合一致し可能であつたのは仕合せな事であつた。若い娘の独り歩きを不安に思う母親に彼女は常に偽りない自分の姿をさらけ出している。1922 年の早春に *Vanity Fair* 誌の在外通信員として欧州に派遣される直前に

「こういう機会を私はどれほど兼々願つて居たか、母上はわかつて下さるでせう。それに私の仕事は、とりわけ私の詩は新しい草で育てなければなりません。此処に居るので瘦せ枯れて来て了いました。こうなる事も判つていたのですけど。もっとこのままで居れば枯れて了うのが見えるようです。……

私は外国旅行をし度いので自由な女として、職業婦人として行つて参ります。」と覚悟の程を述べている。彼女は毎月詩と散文とを各一篇づつ送るという契約で渡欧の機会を得た。19才で *The Lyric Year* に入選した時彼女は大学に学んで教養を高め、詩才の豊かな成長を期した。卒業後の三年半 journalism の波に乗つてはいたが、いよいよ America 詩壇に進出した彼女は更に野心的な希望を抱き「自由な女性」として職業的に自覚ある詩人として伝統の根深い欧州へ旅立つた。それによつて自己の詩の一層の飛躍を秘かに期待しつつ。

註 1) *Flower of Evil* by Charles Baudelaire, translated by Edna St. Vincent Millay and George Dillon.

2) Vincent 家庭に於て又親しい人たちの間での彼女の呼名。

3) *Letters of Edna St. Vincent Millay*, edited by Allan Ross Macdougall, Harper & Brothers, New York.

4) 作者は *Renaissance* と題したが編輯者 Ferdinand Earle の提案に従い英語の綴りに改めて *The Lyric Year* に掲載された。

5) Earle 氏の外に Edward Wheeler, President of Poetry Society of America; William Stanley Braithwaite, poetry editor of Boston Transcript.

6) "When she was only nineteen and still a student at Vassar, Miss Millay wrote a poem which attracted world-wide attention to her." p. 1170 *Adventure of American Lit.*, Edited by Schweikert, Inglis, Gehlmann & Foerster, Harcourt Brace & Co.

7) *Collected Poems*. E. S. V. Millay, p.405

参 考 書 目

Ludig Lewisohn : *The Story of American Literature*, Modern Library, pp. 574-580

Carl Van Doren and Mark Van Doren: *American and British Literature Since 1890* pp.41-46

Zaturenska, Marya & Horace George: *A History of American Poetry 1900-1940*, Harcourt Brace and Co. pp. 265-282